

防災歳時記（18）

—肱川あらしの吹くころ—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮 澤 清 治

冬間近を告げる「肱川あらし」

晩秋のころ、この秋一番というような冷え込みの朝、愛媛県喜多郡長浜町の肱川河口では名物の「肱川あらし」が吹く。

峡谷の川上から霧を伴った強風が伊予灘に向かって、ゴーゴーと勢いよく吹き抜ける。河口にかかる長浜大橋（開閉橋）付近で特に強く、霧風が吹き付け、川面に白波が立つ。大橋の上に立つと、吹き荒れる霧と冷気のため、顔が痛くなり、ペダルをこぐ登校の高校生らが苦しそうである。

町の人々は、あらしが吹き始めると、“冬間近”を感じる。

日本の三大悪風

風のなかで、地形などの局地的な原因によって狭い範囲内だけで吹く風を局地風という。自分の住む所だけ吹いて、少し離れた所では全く吹かないので、「まつぼり風（他人にないしょで吹く風の意）」とも呼ぶ。

局地風は主なものだけでも全国に少なくとも 20 以上はある。赤城おろし、六甲おろし



写真 肱川河口の長浜大橋より肱川上流の峡谷を望む

などはよく知られる。多くの場合、強風を伴うので日常生活や農業・漁業などに悪い影響を及ぼす。

愛媛県のやまじ風、岡山県の広戸風、山形県の清川だしは、昔からその地方の人々を痛めつけてきたので、日本の三大悪風と呼ぶ。やまじ風は東予地方で吹く南風、広戸風は那岐山ろくを吹きおろす北東の風そして清川だしは最上川に沿って吹く東風で、いずれも最大瞬間風速が秒速 30～50メートルに達することがある。

近ごろは、悪い局地風を逆手にとり風力発電などに利用する自治体が増えている。

冷気がノズルのように 噴き出す

「肱川あらし」はなぜ吹くのだろうか。晴天の穏やかな夜から朝にかけて、肱川上流

の大洲盆地(標高約10メートル)では、放射冷却によって冷気が蓄積される。このとき、盆地では、放射霧が立ちこめる。霧は大洲名物である。

盆地の冷気は重く、海上の空気は暖かくて軽い。すると、冷気は盆地から肱川に沿ってゆっくり北に流れる。V字形の峡谷を吹くので、冷気の流れは収束し加速する。白滝付近から風速が増し、峡谷からノズルのように冷気が長浜町の河口に向かって噴き出す。

風速は盆地内では秒速1~2メートル、河口の長浜大橋では10メートルときには17メートルぐらいになる。

強風とともに、峡谷を埋めつくしていた霧も河口に向かって流れ出す。あらしは午前中には止み、大洲盆地の霧も消えて、長浜・大洲地方は午後から穏やかな晴天になることが多い。

哀れ!女芸人たちの死

昔、「肱川あらし」と思われる突然の強風と大波に遭って船が転覆して、多くの人が

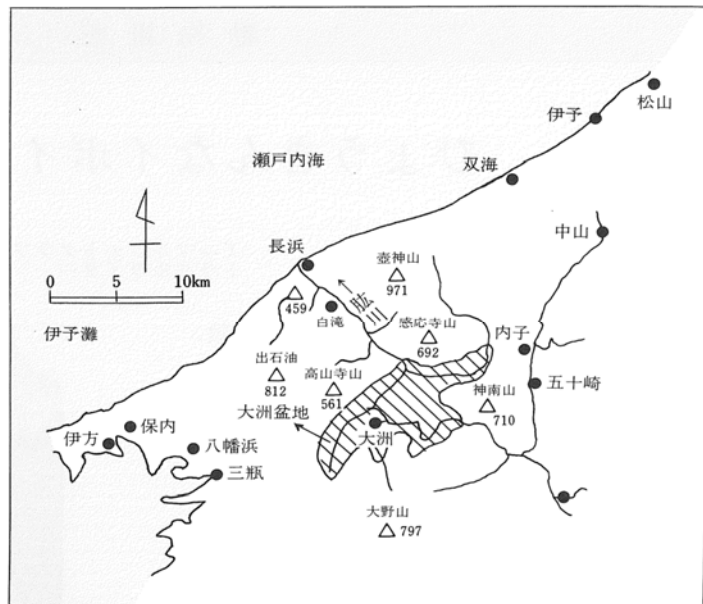


図 大洲～長浜付近の地形略図(斜線は大洲盆地)

死んだという悲劇がある。

明治30年(1897)4月16日の早朝、愛媛県伊予郡中港(現在の伊予港)を出港し、長浜港に向かった2隻の帆掛け船があった。

その日の午前11時過ぎ、両船が肱川の河口にさしかかった際、突如、激しい風浪が怒涛のように襲いかかり、2隻とも瞬時のうちに転覆した。

分乗していた京都女歌舞伎一座の全員23人(男8人、女15人)は、着港を目前にしながらいかに海に投げ出された。付近を探し回ったが、女3人の遺体が発見されただけで、他は行方不明となった。女歌舞伎の日切り興行のため、長浜に来た一行だった。この遭難を聞いて、町の人々は涙に沈み、遭難してから5日後に、現場近くの海岸で寺僧40余人によって23人の盛大な合同葬が営まれた。

肱川町で、名物の「あらしまんじゅう」を食べながら、一座のめい福を祈った。